

〈翻 訳〉

エミール・レーデラー, エミー・レーデラー・ザイトラー
『日本—ヨーロッパ』第1章

舟木 徹男・貫井 隆

1. 訳者まえがき

エミール・レーデラー (1882-1939) は、東京帝国大学でも教鞭をとった戦前ドイツの世界的な経済学者・社会学者である。前号に引き続き、彼が妻エミーと共に著した日本社会論『日本—ヨーロッパ—変容する極東』を、翻訳する。底本としてはドイツ語版 *Japan-Europa Wandlungen im Fernen Osten* (1929) を用いる。なお、ナチを逃れてアメリカへ亡命した後に刊行された英語での改訂版 *Japn in Transition* (1938) も適宜参照する。〔 〕内の語句は、訳文において訳者が補ったものである。

今回訳出するのは、第1章「日本—その国土」である。本章では、日本の国土の全般的特徴、および日本人にとって富士山と桜が持つ意味が記されている。

2. 翻訳『日本—ヨーロッパ』

第1章 日本—その国土

日本の国土は他の国々とは異なっている。海を一部分とする島国であり、大洋の一部を内海とした環状列島である。これらの島々は、北の高緯度域から熱帯域に至る広大なる領域に散らばっており、神的な起源を有するとされている。そして、今日もなお日本人によって、何かしら神々しい世界として尊崇され敬慕されている。

海を渡って日本に来るとき、これがいかにもはつきりと感じられる。何週間もひたすら季節風に吹き付けられる灼熱のインド洋を横切り、香港ではおよそ耐えがたいまでに濃厚な花々の絢爛たる景観を目にすることを最後に、船は進む。〔次に

は〕中国の領海を通り過ぎる。海は殺伐たる单调さで絶えず波打ち、黄色い大陸の泥土によって濁っている。それから上海をあとにして1日経つと、ようやく海が再び青く輝く。そして船上の日本人は感動のあまり陶醉し、郷土の最初の海岸線を眼に収めるべく、まんじりともせず夜を過ごす。やがてこの海岸の地理的な位置を把握するだけでなく、海岸そのものを実際に目にすると、日本人たちはずっと甲板に出たままで、次第に近付いてくる岸辺の光を互いに指さし合う。すると、いつも礼儀正しく節度を失うことのない昨日までの紳士、いかなるときも揺らぐとは見えない清澄な自制と魂の均衡の点では比類のない、あの真に模範的な船客たる日本人が、喜びの余りすっかり落ち着きを失い、とめどなく語り合うのである。何について話しているのか、私たちには知るべくもないが、とにかく彼らは感情も挙措も解き放って語り、笑う。世界中の民族のなかで、それも文化民族のうちで、自分たちの国土にこれほど深く根を張った民族が他にないことは確実である。彼らはその国土と自らが宿命的に結びついていると感じており、この惑星上で自らに与えられた、考え得る唯一の郷土とみなしている。

しかし、確実な記録に依拠するだけでも、ヨーロッパの歴史のほうが日本の神話よりもはるか昔に遡るということは、奇妙な話である。神々の末裔である神武天皇が、この国土の王たるべく出現したのは、キリスト生誕の600年前だという。とすれば、例えばクレタ〔文明〕^①は日本よりも古いことになる。しかしながら、極東の時間は、その連続性により、〔世界の他の地域とは〕全く異なる尺度を持つのである。エジプトやギリシア

が、古代以来連綿として現代の1868年〔明治元年〕に至るまで、造形世界においても、生活要素や日常状態においても、切れ目なく継続してきたような状況を想像されたい。すなわち、私たちの父親の時代に至るまで、歴代のファラオが聖都に座し、数え切れぬほどの世代にわたってこれを統治し造形してきたような状況である。これこそが日本の現状であり、それは、他の世界からの隔絶と自由意志に基づく孤立、そして一切の諸力の自らへの集中によって、いっそうの高みにまで達している。ローマでは、支配権をめぐる相争う諸種族が、次々に交代した。1つの時代が他の時代に続き、1つの時代が減じて廃墟となれば、次の時代はそこから石材を截りだす。土地は言わば無関心の野に等しく、誰もが勝手にそこを住処とする。穀物や肉や乳を産する耕地は、地勢上の利点や土地の豊饒さ、近隣の野を支配する戦術上の便宜などによって、また最後には、それが産する富によって、征服者の心を引き付ける。ギリシアにして然り、ローマにして然り、さらにはヨーロッパの土地一般にして然りである。ヨーロッパの諸民族は言わばその土地の新参者であり、少し前まではその入植地でおのが身を脅かされていたのだ。包括的な郷土感情というもの、すなわち、国民と民族と国土とが一体となった意識が芽生えて以来、どれほどの時日も経っていないのである。

ところが日本では、国土は大昔から民族のものである。神話においては、国家として形成されて以来の日本の歴史は2500年であると想定されている。2500年といえば高々100世代程度である。しかしこの民族は何千年ものあいだ途絶えることなくこの土地を耕してきたに違いなく、また、歴史記録のない時代においても、父祖の地としてその国土を崇敬していたに違いない。この連続性は中断されたことがない。日本人が一はるか先史の時代に遡ることであるが一いかなる構成分子からにせよ、単一的な人種すなわち今日の日本民族となって以来このかた、異国の人間が個人としてこの列島に足を踏み入れたことはあっても、征服者がこの国土を支配すべく渡来したことはなかったのである。

〔もっとも、〕歴史的な連続性ということだけで

は、国土に対する日本人の特別な関係を生み出すにはまだ足りない。〔というのも、〕中国〔の歴史〕にも同様の連続性は見られるが、それでも中国人にとって国土は〔あくまで〕祖先の〔眠る〕土地、すなわち墓地である。ところが日本人は、きわめて個人的な運命の感覚によって、自らの国土と結びついている。国土は日本人にとって、花咲く現在なのである。日本人は国土への関係を享乐的に体験しており、何処であれ、日本人がこれとは別様の態度を長く取り続けられる場所はないであろう。こうした事情には、〔日本の〕国土がもつ独特の相貌が与っている。

この景観については、何を言うべきであろうか？ ひとりの人間の魂のなかに、「日本の景観」として、自然と人為による固有の特徴として、刻み込まれているものは何であろうか？ もちろん、それは1つの視点からのみ把握することはできない。なぜなら、その現象形態はいかにも多様であり、世界の他の地域と共通の要素も多いからである。しかしそれでも、何らかの秘められた計画に沿うかのように、これらの形態的要素はすべて、ここでは明らかに相互に絡み合って、不斷に変化しつつも完全に規定された、ある種の様式上の統一性を生み出しているように見える。この大きな国土全体が、特異な地域であれ、「これといった特色のない」地域であれ、おそらく一つのアトリエから出てきたものなのだ。説得力のある事情を考えるならば、概ねそうしたところであろう。

〔日本を〕遠くから見ると、青い海に浮かぶ小島からなる群島が姿を現す。このとき、外国人であれば、ここでは全てが何と小さく繊細なのか、と思うかもしれない。最初の暗示的なモチーフがいかに軽く囁かれ、全体がそうしたものであると考えられかねない。しかしながら、その後、広大な土地へと入ってくると、すぐに気が付く。この世界では、諸物が巨大なものへと成長するのだ、と。

何よりもまず気づくのは、〔日本の〕国土、とりわけ本州は長く伸びており（この国土を貫く鉄道は、困難な地形の土地に約1200マイルすなわち1900キロメートルも敷設されている）、景観に統一性があると考えられない。本州は〔河に沿って

広がる] 一大流域地帯ではなく、それどころか、そもそも縦谷（じゅうこく）⁽²⁾を流れる川がまったくみられない。むしろ、本州は非常に多数の横谷（おうこく）⁽³⁾によって分割されており、それゆえ、そこを流れる川は、しばしば大河であるが、[その全長は] いずれもきわめて短い。そして、水源はたいいてい、1つの山塊に発しており、その山塊が背後の谷を遮断している。かくして、蜂の巣状の国土構造が発生し、ここから、地政学者はこの国のすべての運命、その使命と未来とを導き出すかもしれない。だが私たちにとっては、[こうした地理的条件は] 景観像が閉鎖的であることの根拠として、および、この国土に肥沃な耕地がきわめて少ないことの原因として、重要であるにすぎない。

しかし、この景観の本質は何であろうか？ 南日本は、日光のなかを漂い、澄んだ空のもと、洗練された文化と植生のなかで人を酔い心地にさせる。古の祭祀の場、大小の丘陵にある寺院や墓石によって覆われており、村落や都市が点在する。それらは、昔の大名の城跡の高い石垣や本州周辺に浮かぶ大小の島々とともに、私たちに挨拶するかのよう姿を見せている。こうした南日本は、おそらく何処よりもまず、明るい日中志向の、自ら以外に服するものもなく生命を謳歌していた古代ギリシアのイメージを想起させる。また国土の中部では、野生の猿の声がいまも響く山の高所にまでヤシ類が自生しており⁽⁴⁾、そこでは、北国の森がこの絵画〔的な風景〕の中に溶け込み、しばしば雪によって照らされた日本アルプスのくっきりとしたシルエットが、地平の境界をなしている。

しかし、これらすべての変化に富む景観、この輝く諸物の無限の多様性の中にあって、永続的なアクセントをなしているのは、太陽、花、そして山々である。

日本の冬には吹雪が襲い、人々は凍えながら何か月も火鉢を囲んでうずくまり、雪解けのなかで四肢はほとんど悴んでしまう。そうは言っても、日本は南国である。日本人にとって1年で最も苛酷なこの時期でさえ、陽が差さない日はほとんどない。例えば東京の緯度であれば、太陽はたいいて

い早朝から家の中へ差し込み、夜の悴みを和らげる。そして、絡みつくような陽光の強力な照射によって、夜のあいだ半ば悴んでいた全ての〔植物の〕根を蘇生させる。地面が硬化して氷のような外殻となることは決してない。そのため、地面にはヤシ類やあらゆる種類の常緑樹が生え、国土は冬でも庭園のようであり、そこに花が無くて淋しく感じられることは決してない。12月に入っても菊が咲いており、楓の紅葉は繊細かつ華麗に、陽を浴びて燃えるがごとく赤く映える。そして1月には早くも梅の花とともに1年が始まる。それは寒い夜の犠牲となることも多いが、雪の下では、早くも春の訪れを告げている。そして、この雪の下春はいかにも喜んで待望される。なぜなら、[日本の春には] 比類なき輝きを放つ太陽が、ヨーロッパの盛夏よりも強い光を、浪費的なまでに放射するからだ。子どもたちはあらゆる束縛を解かれて楽しく辺りを走り回り、老人は店を開いて日向ぼっこをしている。厳しい冬にも、どれほど多量の光が人々の魂に注ぎ込まれることだろうか、また、どれほど無尽蔵の快活さが、この陽光の明るさによってもたらされていることであろうか、そして、破壊的な災厄を克服し、半ば壊滅した生命を繰り返し一から立ち直らせるその力が、どれほどこの陽光によって与えられていることであろうか—このように感じられるのだ。もちろん、夏には、この明るさは、熱帯のごとく重くのしかかる灼熱にまで高まり、誰もが疲れて莫塵の上に横たわる。日盛りになると、この陽光はもはや耐えがたいほどになり、灼けた道路による照り返しがじつに眩しい。この厳しい陽光のなかにいることは何物にとっても耐えがたく、影は何ら涼をもたらさない。高山地帯に限っては、この〔暑さの〕圧迫が緩む。しかし、まさにこの熱帯のような陽光こそが、米やヤシ類、シャクナゲの中に生命の液を通わせるのだ。それゆえ、日本の景観の溢れんばかりの豊かさを、その根源から感知するためには、この灼熱をもまた経験していなくてはならない。

この太陽が樹木に花をもたらす。日本はまさしく花木の国であり、ヨーロッパでしばしば言われるごとく、草花の国ではない。どの月にも、それ

を表す象徴〔となる花木〕がある。日本人を恍惚境に至らしめる、鈍く光る梅や桜、あるいは、燃えるような躑躅、最後に、1年も終わりに近づき秋の霧が山々にますます深くかかる時期には、赤く灼けた楓の葉が燃えるような塊となり、谷底や山腹を大波のごとく埋める。

また、田舎の隅々にまでわたる肥沃な平野や、高地に達するまでの谷や丘陵では、緑の水田が微光を放っている。そこへ無数の細流が注意深く引かれており、その中へと水が一段また一段と送られ、青い空を映し出している。こうした景観のなか、辺鄙な高地の山々は、花を咲かせた灌木によって燃え立つ。これらの山々は奇妙な形で聳えているが、それは、かつて流れ出た溶岩が凝固した形である。それは現在、金属的な形成物となっており、信じがたいほどに澄んでいて硬い。それでいてこれらの岩は脆く、無数の色調を備えており、銀色めいた青い色を帯びている。これらの山々の上には、煙たなびく火山の堂々たる火口が聳え、山々は急勾配の小径の上から溝が刻まれた深みを見下ろしている。それは、終わりのなき激動の中で徹底的に陶冶され、しかしながら今なおその相貌を変えている世界である。そこでは、海から波が打ち寄せて地面を浸食し、何百という数の木々を折る。また、山々がしばしば基底から揺さぶられ、地面は裂け、破碎された土塊のあいだから木々の根が露出する。土はやがてこれらの根を再び覆い、新たな形をなす。山々の形は、この国土がどのようなカタストロフィから生じてきたのか、いかにしてこの国土が、いくつもの流れに分岐したマグマ状の塊として凝固したのかを、今なお示している。思い切って概括すれば、これらの山は、その把握しうる実質においては、皺だらけで、幾重も折り目がついている。〔つまり〕自然の猛威によって投げ出され、突如として凝固した姿なのだ。豊穡な土地と花咲く丘陵のすべてに降り注ぐ澄み切った光のなか、これらの山々は驚くほど堂々たる姿で、狭い谷と谷の間から、広い高原地帯全てにわたって隆起している。

しかしながら、これらの山々はすべて中途半端な山であり、地方の鄙びた小勢力にすぎない。昔は〔人々が〕この山々を訪れることは珍しく、き

ちんとした名称を与えられたこともほとんどない。近代ヨーロッパの自然観が、これらの山々への興味をはじめて呼び起こしたのである。しかし、これらの山々を超越して聳え立つのは、人々が太古の昔から知り、訪れていた山々、大昔からこのかた巡礼者たちが目指した神聖な山々である。そしてこれらの山々のうちでも、他の一切に抜きんでて高くかつ勇壮に聳える山、山のなかの山が存在する。すなわち、霊峰富士である。大海原から立ち昇るがごとく、完璧なまでに明瞭な形姿をそなえたこの山の麓には、豊かな野原が広がっている。周りを囲む丘陵も前山もなく、ただこの山のみが、この野原から雲へと達し、雲を突き抜けて、静謐なる莊嚴のもとに屹立している。いとも高貴な均整をそなえて、この山はしなやかにすらりと聳え立っており、高所では万年雪が輝きを放っている。富士の頂上雲を突き抜けてほのかに光るさまを眼にすることは、往々にしてある。雪に覆われたその山頂が、霞の輪に囲まれて陽光のなかを浮遊するさまを目にすることも、いかにも多い。実際に山頂は浮遊し、漂い動き、かくして、この国土の象徴となっている。この国土は、巨大な諸大陸と同様に大海原のなかに在りつつ、それでいて大陸とは隔てられている。言うなれば、いわばそれ独自の水準において、神的諸力を証し立て、究極的にはそれらの諸力に帰属しているのだ。高みに至るまで樹々の緑に覆われているこの山が、夏の陽光の中できらめくにせよ、あるいは硬い氷と雪に包まれて直視し難いほど眩く光りつつ地平の果てに鋭く屹立するにせよ、纏わりつく霧を脱ぎ捨てて富士が姿を現すときにはいつでも、〔人々の〕眼差しはこの「山のなかの山」へと向けられるのである。年間を通じて崇拜され、夏には無数の巡礼者の目的地〔となるこの山は〕、国土の遥か遠くからも見え、多くの府県の全域がこの山のシルエットの支配圏内にある。東京からでさえ、あの白く大きな、もはやこの世のものとは思えない円錐形が天空に聳える姿を見ることができる。それは〔歌川〕広重が東京〔江戸〕の中心部の橋から描いたとおりである。〔富士山は〕飾り気がなく、高貴にして至高である。もはや火を噴いて破滅をもたらす火山ではなく、

安らかなる莊嚴と孤高一これ以外に表現しようがない—のうちにある。現在もなお、東京からはいつでも富士をみることができる。この都市の中心部に所かまわず建設されたグロテスクな摩天楼の高みから、この国に生まれた人々は富士を毎日見ている。彼（女）らは、書記やタイピストの姿をしてはいても、それはあくまで外形に過ぎない。彼（女）らの眼差しは再び神話に感応する太古の日本人の眼差しとなっており、この現代的とも形容すべき都市の只中にあってさえ、この「山のなかの山」に対し、尊崇の念を込めて日々敬礼しているのだ。

この日本的景観は、そのあらゆる魅力と偉容、その攪乱するような気まぐれと不意の壮大さ、その形状の多様性などが、花々の色調の変化によって高められながら、波打つ大洋のなかに点在せしめられている。そして、この大洋は浜辺を優しく包み、規則正しい潮の満ち干が岸辺を洗うだけでなく、荒れ狂う自然の猛威が襲い掛かる波と化してこの岸辺を蹂躪することが往々にしてある。こうした日本的景観は、単に背景的なものであるにとどまらない。つまり、単に「実」生活にとって友好的ないし敵対的な枠づけとして—例えば祝日の晴れやかな装飾として—この景観が〔人々の〕生に奉仕している、ということにとどまらない。日本の景観は、太古よりこのかた、人々の魂の中で、神代の故郷として、大いなる出来事の舞台として、際立って活発に生きている。あるいはまた、それは、巨匠の作品のうちに表現される大いなる象徴として、生きている。それは常に新たなものとして感受されているのであり、学校の読本や国家の式典で用いられるような単なる慣用語法と化したものではない。

ヨーロッパ人が自らの景観を一たとえそれが輝く色彩を彼らの眼へと惜しみなく放つ日当たりのよい南方の景観であっても一発見したのは、都市と石造の家に呪縛されていた彼らが、景観への文学的情緒的關係へと足を踏み入れるに至ってからのことであつた。ヨーロッパ人は北方の人間として自己を形成し、陰鬱な冬の数か月を、石畳の街の大家屋の、暗く煤けた炉端で悲しみのうちに過ごさねばならなかった。そのため、彼らの眼は

ついに太陽へと向かつて開かれ、その憧憬の念から、彼らは南国のオリーブの森へと、あるいは、北欧の谷の草原へと駆り立てられたのである。ヨーロッパ人が北方の人間としてまずもってそこに発見したのは、美しい形状の温暖な野原であつた。そして、ここから始まって—それ以後もずっと—彼らの眼差しは自ら〔の故地〕へと回帰し、広々とした異形の山岳地帯のうちにも、彼らの内面の画像の描線を記入することができたのだ。したがって、ヨーロッパの景観に対する関係、あるいは景観一般に対する関係が純粹に美的・絵画的なものとなったのは、かなり最近—すなわち、せいぜい 200 年前以降のことである。景観に対するそれ以前の関係において、ヨーロッパの原野は、重要な叙事詩の背景あるいは遺跡の背景と見なされるにすぎなかった。しかし、もはやそうした古い見方ではなくなってしまったのだ。

しかり、私たちが今やついに獲得したこうした〔景観との〕関係は、単に教え込まれて創られたものにすぎないのではなからうか？それは本来的なものなのだろうか？平均的なヨーロッパ人の眼は、日本人〔の眼〕の如くに〔ものを〕見ることができるだろうか？私たちは、中禅寺湖畔の聖なる男体山へと向かう白装束の巡礼者の一団の、忘我の境にある沈思の眼差しのみが私たちの傍らを通り過ぎて行った様子を、決して忘れることはないであろう。とりわけ印象深いのは、湖岸に座って休んでいたひとりの人物である。それは、雪のように白い衣装に身を包み、手には先のとがった巡礼者の笠を持った老農夫であつた。彼は日没の瞬間を待っていたのだ。そして、この農夫はその景観像を〔深い息とともに〕おのが身内に吸いこんだ。それは安らぎに満ちた様子だったが、そこには英雄的な昂揚もセンチメンタルな感動もなかった。農夫は、疲れた人が眠りを貪るごとく、安らかに呼吸しながら、光の諸相を、また、それとわからぬほどにゆっくりと薄れゆく色彩の混淆を味わっていた。それは画家のごとく客観的であり、感傷を交えておらず、〔宗教的〕礼拝のようでも、美術の修練のようでもなかった。老農夫は景観の一部であり、景観は老農夫の一部となっていた。そう表現するほかに術はない。日本人の眼

は、「無教養な」人達にあってさえ、私たち〔西洋人〕とは違った仕方で見えていること、私たちよりもはるかに具体的に、しかも客観的かつ繊細に見ていることは、〔今や〕明白ではなからうか？〔日本の〕子供の手によって描かれた小さなスケッチはどれも、このことを証明していると思われる。

数千年間を通じて、日本人は自らの国土を耕し続け、かくして、すべての景観を細部に至るまで造成してきた。自然のままの山並を、日本人は求めなかったのである。さて、溪谷や山腹から陸や海へ目を向けるとき、その視線は慎重に分割された耕地、見事に測量された土地に出会い、長く伸びた村々の微光を放つ〔瓦〕屋根の彼方へと向かう。そして、森の中は至る所に神社があり、また、そこへと通じる鳥居（近くに神社があることを示す、扉の付いていない特徴的な形の門）がある。これらの鳥居は、景観がその枠の中に収まって見えるよう巧みに設置されている。その構成力はしばしば途方もない規模に達する。日光のように、土地と山並の全体が古木の立ち並ぶ長大な並木道をなし、それが墓地寺院の聖域の一部となっているような場合がそれにあたる。また、急流を越えた高みにある急勾配の斜面の一部が山の上で芸術的な段丘となっており、それが寺院の広々とした敷地と庭になっている場合もこれにあたる。そこでは、石段を山の高みへと登ってゆくにつれて、いとも騒がしい現世の華美は、これと対照をなす墓地寺院の陰鬱で控えめな厳粛さへと移行してゆく。鬱蒼とした杉林のなかにあるこれらすべてのものは、何百年もの星霜を経た樹冠の影に覆われており、景観へと向かって抜け目のない眼差しを投げかけている。それは霏のかかった平地にまで遠く及び、かくしてこの平地をも構図の中へと強引に引き入れている。

しかしながら、〔日光のような例はまれであり〕たいいていの場合、鳥居があるのは、あたかも偶然のごとく曲がりくねった松の若木の生えている、大して目立たない丘の高所であり、その鳥居〔の枠〕によって、景観をより凝縮的に捉えることができる。このことは、日本の農民自身にとって、自分の村や耕地が絵画として完成するということ

を私たちに教えている。景観に視線を向けるとき、日本の農民は、選択的な、描画的な眼で見える。いろいろな偶然が、彼らにとっては綿密に形成された絵画である—そして、日本人である限りは誰しも、こうした絵画を幾百となく自らの内に携えている熱心な収集家なのだ。

この〔日本の〕景観は年間通じて多くの祝祭日の舞台となる。そこでは、公式の祭りがある。多少とも宗教的な祝祭、家庭での祝祭、寺社や都市の祝祭、そして、民族の祝祭がある。しかし、他のいずれにもまして高揚した、際立った祝祭は、桜の祝祭である。確かに、元日の祝典の雰囲気はこれよりも盛大であり、また、その他の祝祭においても、賑やかなまでの華美や贅を尽くした準備がみられる。しかしながら、桜の祝祭では、自然の力の突発が歓喜をもって迎えられる。桜の祝祭は暦の上での日付とは結び付いていない。それは、自然の諸力が、〔日本の〕景観と民族のうちにあって、陶醉とともに燃え上がる時なのだ。

陰鬱な雨が降り、まことに重苦しく蒸し暑い日がある。ぬかるんだ道をひどい湿気に包まれながら何とか苦勞して歩かねばならず、昼頃になってようやく弱弱しい光が障子越しに差ししてくるような日〔である〕。そんな1日の後に、太陽が勝利の光明を放ちつつ水平線の彼方に姿を現し、命を吹き込む海風が私たちの五感を重苦しい圧力から解き放つ。国土は突如、恍惚たる桜の花を、北方の国では決して見ることのできない蒼い天空へと向かって、泡を噴き上げるごとくに咲かせる。それは何日間かの短い酩酊であり、ほんの数時間であることすら、しばしばである。このとき、山腹の至る所で、また庭園で、蒼白の蕾がほころび、明朗なる陽光の輝きが、膨れ上がる色彩のうちに光を放つ。〔それは〕並び立つ太古の巨木の上を紅白の花々が川となって流れるがごとくである。〔そのため〕それらの木々の枝はヴェールで柔らかく覆われているように見える。あるいは、段状に続く滝のごとくに咲いた桜の花の下に〔木々の枝は〕隠されてしまう。その幹はしばしば奇妙な形に湾曲しており、木々からは生気が抜け落ちていく〔かに見える〕。つい昨日まではまだ、これらの木々は弱弱しく、まるで圧迫されているかの

ごとく、自らをかりうじて斜面に繋ぎ留めていた。しかし病、老、死—これらがすべて、見かけ上の現象にすぎなかったことが、いまや明らかになる。生命の樹液は一切の束縛から解き放たれ、大地の諸力、深みからの荒ぶる流れが、貧相な幹や枝の中を滔々と上昇し、繊細な淡い光をなして花を咲かせる。その年が持つ意味の全て、死して動かぬまま流れてゆく〔かに見えた〕その1年は、この計り知れない開花〔の時〕に集約される。また、他の若木の幹や目立たない低木が、あるいは道に沿って、あるいは丘の斜面を登って、あるいは川岸に、あるいは家々の間のごく狭い隙間に、植えられている。至る所で、それらの木々から泡立つような光がほとぼしる。そこからは、確かな、若々しい、意気揚々たる諸力が放たれている。

この民族は、自分たちの血潮のなかに、この数日の酩酊を感じ取り、神秘的な生の昂揚を感受する。そして、至福の恍惚のうちに自然と一体化する。彼らは自らを、この花咲く大地に萌え出ずる新芽のごときものと感じ、民族の血潮のうちに太古のリズムが生まれる。それは、意識の深みに潜んでいた欲求に発する、神聖なる舞踊となって姿を現す。

国土には、桜で有名な場所や通りがいくつもある。多くの都市は、あたかも公的な義務であるかのように、花咲く古木のある公園を所有しており、つつまじやかな庶民はそこを逍遙して楽しむ。また、どの地方にも、庶民の祝祭のための有名な桜の山がある。どの県にもそれぞれ桜の名所があり、広く伸びる環状列島のなかにあるこの帝国そのものが、日本の中央の豊かな山の景観の、曲がりくねった道と急峻な丘を登ったところに、この国で最大の花見の舞台を有している。何世代も前にある将軍によって設けられたこの名所⁽⁵⁾は、桜の木の重要性を証している。それは、日本の生命の象徴として最も愛されている樹木であり、まさにこの国の国民的な樹木である。

桜の盛りともなると、大勢の人々がこれらの名所へとおもむく。家族連れや、いくつもの家族集団が、年長から年少までの子どもを皆引き連れて、きちんと重ねられた食物の容器〔お重〕と十

分な量の日本酒、そして莫莖を持って出かける。こうして彼らは、丘の上の花咲く桜の木の下で、まだ草の生えていない地面に陣取る。彼らはそこに莫莖を広げて陽光を楽しみ、どんちゃん騒ぎのなか話に花を咲かせ、二重三重の意味を持つ駄洒落の言葉遊びに打ち興じる。そして、彼らは太古の輪踊りの中へと歩み入るが、その際しばしば祭儀に起源をもつ想像上の動物⁽⁶⁾の格好に身を包んで、神秘的で奇妙な演舞をしつつ練り歩き、互いに歌い、笑い合って高揚する。隣り合う集団はそれぞれ盛り上がり、いっそうの馬鹿騒ぎ、ますます恍惚たる朦朧状態が現出する。

〔花見の人々にあっては〕世界が時間の制約を受けなくなる。誰しも宵の訪れを考えはしない。〔花見の〕時間は際限なく伸び、山は泡立つような豊かさで無量無数の歓喜を与え、そのいずれもが各々の人生を輝かしめるに十分なのだ。

しかし、やがて太陽は沈む。その色は鈍い灰色になり、花さえも、消えることを望むかのように色褪せる。南方のきらめく夜空の下で、致死の諸力が地より昇る。そして、すでに翌日の早朝には、花卉がその萼から離れ、微風にそっと運ばれて地上へと滑り落ちる。桜の花の死は、その開花と満開の輝きに劣らず美しい。その可憐なる花卉は1日じゅう散り続け、地と草を広く覆う。世界はあたかも反転したかのようになり、ついには、淡い光が地面から空へと向かって放たれるようになる。古典的なハラキリにおいて、桜の花卉がひらひらと散るその下で、武士は自殺する。桜の花卉が濃く淡く降りしきる下で自らの命を雄々しく絶つことほど、美しい最期はない〔とされる〕。それはあらゆる罪を消滅させ、反逆や過誤、また前代未聞の所業の後でさえ、大いなる景観、すべてを包摂する民族の共同体へと〔彼を〕再び還らしめるのである。

また、こまごまとした心配を抱えて日々を過ごす民衆でさえ、そのような〔桜花の咲き誇る〕際には、並ならず崇高な心境にまで高められる。人生が長かろうと短かかろうと、それがいかほど重要だといえるのか。それが桜の咲きほこる数時間を一この太陽と大地の婚姻、この光を放つ物質の恍惚、泡沫と化したこの微光、この民族をば常に新

たに大いなる存在へと統一せしめるこの奇蹟—をもたらしさえするならば、それで十分ではないか[という心境である]。かくして、桜の花はこの民族にとって、彼らの生を象徴するものとなるのであろう。彼らの生もまた、[桜と同じく]前代未聞の輝きを放った後に、陽光と風のなか、執着なく消えゆくべきものとされている。次なる世代がこれに続く。来たるべき年は、新たな花をもたらす。

〔日本人の〕血潮の中に流れる伝統、あるいは、世代の連続の中の生。それは、幾つもの世代の流れのなかに埋め込まれている。それは全体という母胎に包まれており、全体の一部としてのみ自らを形成し、不朽たらしめ、陶冶する—日本民族の大波はこうように音を立てて打ち寄せる。日本民族は何かしら大河の流れのようなもの、植物のようなものを自らのうちに持っている。それは意図せずしてつき動かされ、衝動的であり、自らをヴェールに包み、古い鑄型のなかに自らをいっそう完全にはめ込み、暗に感じられる目的へと向かってゆく…

だが、この民族や国土を、咲き誇る桜花の恍惚のなかで見たことのない者は、これを—民族にせよ国土にせよ—知っているとは言えないのである。

(了)

注

- (1) クレタ文明：前 20 世紀ごろから前 14 世紀ごろまで、クレタ島で栄えた文明
- (2) 縦谷（じゅうこく）：褶曲（しゅうきよく）山脈の走向と平行する谷。浸食に弱い地層の部分が浸食されて谷となったもの。
- (3) 横谷（おうこく）：山脈を直角に横切る谷。一般に峡谷をなすことが多い。
- (4) ヤシ類：棕櫚のことか。棕櫚は耐寒性があり、北海道にも自生可能。
- (5) この名所：徳川 8 代将軍吉宗（1684-1751）は「享保の改革」における経済政策の一環として、隅田川堤（向島）や飛鳥山（王子）、御殿山（品川）などに桜を植樹し、花見を推奨した。現在の庶民の花見の風習は、これに由来する。したがって、ここでレーデラーが言及する日本一の桜の名所は、これらのいずれかである可能性が考えられる。また、吉宗の故郷である紀州の徳川廟長保寺も桜の名所であり、この寺である可能性も残る。
- (6) 想像上の動物：獅子か。

参考文献

- E. Lederer, E. Lederer. Seidler. 1929 "Japan-Europa Wandlungen im Fernen Osten" Frankfurter societäts-druckerei g.m.b.h.
- E. Lederer, E. Lederer. Seidler. 1938 "Japan in Transition" Yale University Press.